



あれこれ

2021年 第2号-1

緑のカーテン写真コンテスト2021

天童支部 三浦仁恵さん報告

緑のカーテン写真コンテスト2021

平成26年に始まった緑のカーテン事業。第8回となる今年は、コロナ禍の収束が見えない状況のため、昨年に引き続きオンラインでの写真コンテストを開催することになりました。緊急開催となった昨年の経験から実施時期を1ヶ月早め、年明けから準備を開始。つる植物の苗づくりと無料配布、チラシ作成と配布。また準備と並行して、昨年の受賞者へのタネ(自家採取と東北電力さんからのご提供)のプレゼントの送付等々。年度末と確定申告の時期を跨いでの活動は多忙を極めました。メンバーの強力なバックアップのお陰で開催に漕ぎつけることが出来ました。イベントが中止になり外出が減っている状況で、コンテストの周知方法が悩ましく、案内チラシを公共施設に置かせてもらっても効果があるかどうか…。そこで試しにチラシに種を付けてみたところ、興味を持って下さったのか、嬉しいことにチラシが完売(※無料です)!!

また山形新聞さんに掲載して頂いた効果も大きく、8月末の締め切り間近には応募作品が毎日メールに届くようになりました。

キッズの部 受賞作品



一般の部 受賞作品



レイアウトの都合上、文字フォント、配置を編集させて頂きました。三浦仁恵さんありがとうございました。

天童支部 三浦仁恵



※種を入れた小袋を、ホチキス留めし配布。

応募作品はどれも素晴らしく、学校や保育園、ご家庭の他、店舗や工場等、緑のカーテンを取り入れエコ活動を楽しんでいる方々がこんなにいらっしゃるのかと驚きました。

作品が素晴らしい分、賞の選定に頭を悩ませ、天童支部の役員と草刈女性委員長にも協力を仰ぎ、多数決を行いました。受賞作品は山形県建築士会HPに掲載中です。

<http://www.yamagata-ken.org/jowhctggi-17/#>

最後になりましたが、いつも温かく見守り、開催にご協力下さった関係者の皆様に心から感謝申し上げます。



和の空間 取材記2021

米沢支部 村山紀子報告



上杉家家紋



床の間



階段天井



階段



廊下



外観



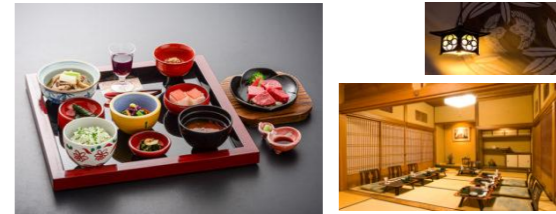
雪の中玄関



中庭

「上杉伯爵邸」は米沢の上杉伝統の郷土料理のレストランとなっております。約200年前の上杉10代藩主、上杉鷹山公の凶作に備える施策として「かてもの」という食の手引書を藩内に配付しました。「かてもの」は山野に生える草木の食法や栽培方法を懇切に記されており、後の飢饉で大いに役立った。その伝統料理「かてもの」を食べることができるレストランは建物とともにおすすめです。

風雅な日本庭園を望みながら、伝統料理を頂く。是非、米沢にお越しの際は予約でどうぞ!



献膳料理(月の膳)を頂きました

- ・米沢牛のいも煮・紫蘇巻き・うこぎご飯・おみ漬け
 - ・鯉のことこと煮・塩引寿司・冷汁・味噌汁(食用菊入)
 - ・ぶどうの寒天・米沢牛ローストビーフサラダ
- とてもおいしかったです。ごちそうさまでした。

「魅力ある和の空間」他の支部素晴らしい作品です。建築士連合会HP(令和4年3月公開予定)ご覧になって下さい。

米沢支部女性部のみなさん
残念ながら2人欠席
忙しい中みんな仲良く頑張っています。



令和3年度第30回全国女性建築士連合協議会（福岡）オンライン分科会 R3.9.25 鶴岡支部三浦美毅さんの報告 村山支部草刈めぐみさん報告

3-1分科会「熊本地震で被災した古民家を活かしたまちづくり」

2016年4月14・16日に前代未聞の震度7に2度見舞われた熊本市益城町(熊本市の東に隣接する人口33,000人の町)在住の熊本県建築士会松野陽子氏がコメンテーターです。
 ヘリテージマネージャーに登録され、地震以前に153棟を廻って熊本県の近代和風建築の調査をされていたそうです。
 地震後、2016年5月から比較的被害の少なかった文化財レスキューを開始され、2017年1月から「益城の歴史遺産を守る会」を立ち上げ建物を含む文化財の救済活動に取り組みました。
 甚大な被害のため応急危険度判定で赤紙が貼られた家で、修理すれば十分に使えると思われる建物が養生されずに、地震ではなく雨漏りで手の施しようが無くなった物も見られ、このままでは益城町から古民家がなくなってしまうのではないかと危機感を持たれたそうです。
 全国で初めての取り組みとなる「未指定文化財」への支援を打出し、熊本県文化課から市町村の文化財担当者へ文化財ドクターの追加物件を調査するよう文書が出され、県の補助内定に至り、修復工事が完了した古民家は順次登録文化財への申請を行ったそうです。
 修復工事した古民家はコロナの影響で計画が遅れていますがレストラン、宿泊、体験施設の新規事業を行う計画で動いているそうです。
 被災後に文化財指定され修復に至った社寺の報告も興味深かったです。
 松野氏の、「被災された方とんでもないことを話すことで寄り添っていけるといいな。建築士としての知識のスキルアップは大切だけどコミュニケーション能力をあげていくことも大切で、寄り添い続ける力を持ち続けたい。平時からの地道な活動が有事の際役立つ。」という言葉が印象に残りました。

3-2分科会「高齢社会とまちづくり／私のまち 起承転...」

1992年6月より秋田県鷹巣町「福祉のまちづくり」におけるワーキンググループの活動に参加された、秋田県建築士会の松橋雅子氏がコメンテーターです。
「起」地方で暮らす高齢者の暮らしの実態を把握、様々な課題を掘り起こし分類することから始めた住民参加の福祉のまちづくりを振り返った報告でした。
 在宅ケアで高齢者のみなさんから悩みを聞きながら、建築士としてみんなが安心して暮らし続けることを可能にするために、まずは「住環境整備」が大事であると、松橋氏一人でワーキンググループ活動をスタートさせたそうです。その後活動報告をするたびにメンバーが増え、大工や福祉用具販売営業マン、理学療法士など多種多様なメンバーが増え、実際の住宅改修の現場にて助言・工事を行ったそうです。**「承」**住民の意識が変われば町は変わる！と実現できたことがたくさんあり**「転」**どんなに重要な活動も社会情勢に合わせてギアチェンジが必要になったり**「...」**立ち止まることでこれまでの軌跡を振り返り軌道修正を可能にする時期が訪れたり2005年4月、旧鷹巣と近隣3町は対等合併されたそうです。住民を巻き込む形で合併議論がヒートアップしたものの、いざ合併が決まったらあまりにも呆気なく当初は実感が湧かなかったそうです。一生懸命活動しているときは、周りを見る余裕もなく前進することばかりを考えてしまいますが、立ち止まってみると目指す方向や目的に追われ周りを見回す余裕がなかったことに気づかされます。その余裕のなさが、新しい仲間を増やせなかった要因の一つだったのかもしれない。実際活動して言えることは「まちづくり」活動はグループでなくても一人からできること。そして日々の暮らしの延長線上で「自分ができること」を継続していくことで、その時、時代に必要な「まちづくり」につながっていきます...。と報告された松崎氏の言葉で彼女が活動にかけた情熱の大きさを思い感動しました。うまくまとめられませんが、ぜひ連合会HPにUPされる分科会動画を皆様もご覧ください。

4-1分科会「森林で自立する村づくりと熊本復興支援」

2012年当時、20歳から5年の任期付で、五木村(いつきむら)の建設課・農林課に勤務していたという熊本県建築士会の持田美沙子さんの発表。
 五木村(いつきむら)は、熊本県南部、標高1000m以上の山々が連なる九州山地の奥深くに位置し、総面積の94%が森林に覆われています。村は、この「森林資源によって所得向上と地域活性化を促す＝林業で未来を切り開いていく」というビジョンのもと『森林で自立する村づくり』宣言をしました。しかし、自治体行政というものは腰が重いという印象。そこを持田さん自らが事業資金獲得に動き補助金を獲得。そこから、誕生した「五木源住宅」そして五木源住宅協議会。五木(いつき)の源(みなもと)と書いて**ごきげん**と読みます。粋ですよ。人も自然も地域もみんながごきげんになる世界を目指しているとのことです。
 五木源住宅協議会には、建築士・工務店・製材所・流通業者・生産者が協定を結び活動しています。
 協議会は、2016年の熊本地震以前から活動しており、被災後すぐに組み立て式木製ベッドを提供することができ、復興支援住宅の設計、住宅相談など復興支援にも携わったとのこと。
 五木源住宅で使用する木材は、五木村産の葉枯らし乾燥材。地産地消という言葉が聞くようになって久しいですが、五木村のように林業で経済が回っている地域がどれだけあるでしょうか。「木材生産者にお金が帰る仕組みが必要」という言葉に最もだと思いました。地元の木を使った住宅の普及に尽力され、災害時の仮設住宅、自邸にも五木源住宅を採用されています。

- 五木源住宅提案の視点
- ①森林林業の問題解決の一助
 - ②木の持つ力を最大限に発揮する構法
 - ③伝統技術の継承
 - ④住む人の健康に配慮した家づくり
 - ⑤地域と繋がりがしやすい工夫



災害時のことを考えるとどんな住まいがいいのか。地震後には平屋が多く建てられたけれど、豪雨災害時には2階以上への避難を考える。水害で合板や石膏ボードが水を含むと耐力が低下しカビが発生するけれど、**天然素材は洗えばまた使える**。「コロナ禍でウッドショックとなった今、建築に携わる私たちが深く考えなければ」という言葉が胸に響きました。

今後の展望（五木村山村活性化協議会の活動）

(1) グリーンコープとの連携



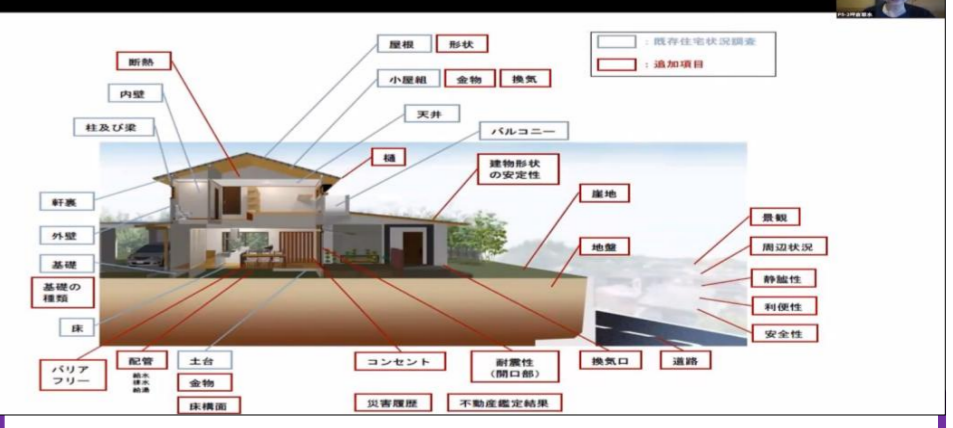
- ・山に入って 森林の伐採見学
- ・製材所に行って 製材を見学



上:発表の持田さん
下:司会の竹崎さん

4-2分科会「空き家 みえるカルテ」

阪神淡路大震災以降、既存住宅の耐震診断、補強、インスペクションに取りむ島根県建築士会の坪倉菜水さんの発表。
 既存住宅状況調査技術者の資格化から4年が経ったが、未だに確立したと言えない既存住宅のインスペクション。既存インスペクションによる「劣化」だけでは表示できない耐震や資産価値等の性能を可視化するために、新たな項目を加えた「良質住宅インスペクション」とそれを所有者や購入者へ可視化するための「見えるカルテ」を、国交相の平成29年度住宅ストック維持向上促進事業の採択を受けて作成しました。



そもそもインスペクションの目的は、瑕疵の存在の可能性の表示と、躯体防水に関わる劣化の表示です。これらは、建物の資産価値に大きな影響を及ぼします。しかしそのデータを売主買主が読み取り活用できるかという残念ながら難しいのが現実です。通常のインスペクションに付加して資産価値や性能評価を行い、それをバランスシートで見える化し、流通の過程で、売主買主にとってより有益な情報とし活用できるデータにすることを目的としています。

「空き家見えるカルテ」で表示できる性能は「資産価値」と「安全」「居住性」です。

調査時点で、劣化以外に耐震性、省エネ性能、環境を評価できるように評点を1~3に分類し簡易に建物診断できるように項目整備を行いました。

診断の結果を評価だけのツールに留めない工夫として、レーダーチャートにします。
 レーダーチャートに基づき性能が低い部分、バランスが取れていない部分について、評点を上げるには、グラフを円に近づけるには何が必要か、何を専門家に依頼したらいいかを選択できるように配慮しています。
 既存住宅状況調査技術者にとっても、売主買主にとっても見やすく分かりやすい「見えるカルテ」が今後実際どのように有効活用されていくのかの取り組みも、お聞きしたいと思いました。